

氏 名 中山 京子

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大乙第 204 号

学位授与の日付 平成 22 年 9 月 30 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 先住民学習の理論と実践  
－ポストコロニアル人類学の活用－

論文審査委員 主 査 教授 中牧 弘允  
准教授 鈴木 紀  
准教授 林 勲夫  
教授 森茂 岳雄（中央大学）  
教授 大津 和子（北海道教育大学）

## 論文内容の要旨

本研究は、子どもたちの先住民に関する認識とその問題点を明らかにし、ポストコロニアルの視点から内外の博物館と学校における先住民学習を検討し、ポストコロニアルな視点にたった先住民学習の必要性和、教育における文化人類学の活用の意義を述べることを目的とする。

多くの日本の子どもたちはメディアや世の中に流布している言説に影響され、先住民について「未開」「原始的」といったステレオタイプなイメージをもっている。そこには、コロニアリズムの見方が反映され、すでにアメリカで指摘されている先住民に対するステレオタイプで本質主義的な認識の問題点とも一致している。この課題を克服するためには、学校教育や先住民に関する展示や研究を行っている博物館において、子どもの認識の改善にむけた教育活動が必要である。その際、単に先住民について学習する機会を増やすのではなく、ポストコロニアルな視点にたった先住民学習を展開しなければ、コロニアルな見方を脱した認識を育てることはできないだろう。

先住民研究を担いポストコロニアルの議論を展開してきた文化人類学から教育学は多くのことを学ぶことができる。これまで文化人類学と教育学が接近し、教育人類学の研究が活発化したり、参与観察といった文化人類学の手法を導入して教育活動を分析したり、フィールドワークを子どもたちの学習活動に活用したりすることなど、一定の成果はみられた。しかし、文化人類学において、民族誌をどのように描くかをめぐって、ポストコロニアルの議論が思考の枠組みのパラダイム変換を求めてきたにもかかわらず、教育学では文化人類学の手法ばかりを学び、思考の枠組みや議論を学んで教育実践研究に反映させる努力を怠ってきた。また、特に日本の文化人類学が教育研究にポストコロニアル議論をつきつけることもなかった。先進諸国にくらす人々の生活は、歴史的に諸外国の先住民の土地や生活、文化の収奪の上に成り立ってきた側面がある。それゆえ、文化人類学の研究成果や議論に学びながら教育において、子どもたちの認識を改善するような先住民学習を展開する必要がある。しかしながら、これまで日本においては文化人類学者も教育学者も子どもたちの先住民認識を問うこともなく、教師たちが人権教育や地域文化学習として北海道を中心にアイヌ学習を細々と行う程度であった。

本論文は、まず、序論において文化人類学と教育研究の接近の経緯、ならびにポストコロニアル論と文化人類学における先住民研究についてレビューし、現在の先住民学習の課題とポストコロニアルな視点にたった先住民学習を展開するにあたって必要な研究視点を導き出した。そして、従来の先住民学習とポストコロニアル人類学の視点を活かした先住民学習の相違を示した。

第1章では、先住民学習の先行研究として日本、アメリカ、カナダの事例をあげた。それぞれの事例には特色や課題があるが、アメリカやカナダではポストコロニアルの理論が、地域の課題として教育実践に反映され始めていることがわかる。第2章では、日本の子どもたちのアメリカ先住民を中心にした先住民認識を明らかにし、アメリカで指摘されているステレオタイプと一致することを示した。そしてステレオタイプの修正をはかるアメリカの教育活動の実践的取り組みを検討した。

第3章と第4章では、子どもたちの認識の育成を担う博物館での教育活動に注目し、ラ

イデン国立民族学博物館と国立アメリカン・インディアン博物館で行われている教育活動と、学校と連携して行われている先住民学習についての事例をとりあげた。ライデン国立民族学博物館では、特別展「インカ帝国展」において「タンタン」というキャラクターを展示に導入し教育プログラムを展開したが、それはかえってコロニアルな視点を強化する結果となっていることを指摘した。またキャラクター「タンタン」は日本でも子どもや若者世代に広く知られ、日本の子どもたちへの影響についても言及した。アメリカ先住民自身の声が反映されている国立アメリカン・インディアン博物館での学校プログラムの事例では、実際に行われているプログラムの活動場面から、先住民ではない子どもがポストコロニアルな視点にたつて先住民について学ぶことの意義を提示した。

第5章では、アメリカの学校教育において、コロニアリズムの原点とも言えるコロンブスがどのように扱われているか、ナショナル・スタンダードや実践事例をあげ、複数の視点からコロンブス到着500年をめぐる表現について考えさせる授業実践が行われていることを示した。

第6章と第7章では、ポストコロニアルの視点にたつた先住民学習に学び、日本の子どもたちを対象にした先住民学習を構想・実践しながら、その可能性と課題を検証した。先住民との交流や現在の生活の様子を知ることを通して、日本の子どもたちも低学年段階から自らの本質主義的な先住民認識に関するメタ思考ができること、また構築主義的な見方を求める思考の育成が可能なことを示した。

第8章と第9章では、日本の植民地支配の歴史や観光産業の発展による経済的関係の深化にもかかわらず、日本の教育ではほとんど触れられないハワイ、グアムなどの「南の島」に焦点をあて、ポストコロニアルな先住民学習のこれからの可能性を探った。第8章では、「南の楽園」沖縄やハワイに押し付けられた負荷を考察した上で、沖縄とハワイに共通する植物パンダナスを取り上げ、文化人類学者から学びながら先住の人々の文化を国家の枠組を越えて思考する教材としての可能性を検討した。そして国立民族学博物館特別展「オセアニア大航海展—ヴァカ モアナ、海の人類大移動—」と連動したワークショップや教員研修会などの実践活動を記述した。第9章では、現在年間約90万人近くの観光客が訪れるグアムをとりあげ、スペイン、アメリカ、日本、戦後アメリカのコロニアリズムによって生じた文化衰退と、現在の先住民チャモロのアイデンティティ維持の教育的取り組みを報告し、そこから日本の先住民学習として学ぶべき視点を抽出した。

先住民学習は、先住民児童生徒のために用意された学習ではなく、すべての児童生徒のための学習である。本論で主張しているポストコロニアルの視点にたつた先住民学習とは、植民地主義時代の後においてさえなお続く支配者による言説や見方に対する批判的視点や、その視点をもとに反省的思考をもって先住民に関して学ぶことを意味する。ポストコロニアル人類学に対しては、文化を語ることは本質主義的であると烙印を押し議論を封じ込めてしまう傾向があるという批判が起こり、議論が続いているが、教育学ではそういった議論に学ぶこともなく未だに先住民に関する一方的な見方による教材が示されている。だからこそ、教育研究の分野においてはポストコロニアルな視点にたつた先住民学習を展開し、ポストコロニアル人類学の議論や文化人類学の研究成果を活用することが課題であり、他方では文化人類学者による教育研究への積極的な関与が求められている。

## 博士論文の審査結果の要旨

本論文は、日本における子どもたちの先住民に関する認識の問題点を明らかにし、学校と博物館での先住民学習をとりあげ、植民地体制とそれに起因する状況を研究するポストコロニアル人類学の視点に立ち、近年の文化人類学の研究動向を教育実践に活用する試みと、その理論的枠組みについて論じたものである。本論は4部構成、全9章からなり、それに序章と終章がついている。

序章では、先行研究のレビューと日本人児童生徒の先住民に対するまなざしの検討に基づき、その問題点が抽出される。すなわち、いくつかの先行研究において、日本の子どもたちの中にアイヌを含む先住民に対するステレオタイプな認識や偏見が存在することが指摘されてきた。それは、これまで日本の学校において先住民に対する学習がまったく行われてこなかったか、行われたとしても、例えば、アイヌ民族の文化を歴史分野においてのみ取り扱うため、「古いもの＝不便なもの＝劣ったもの」というイメージを付与し、むしろ、子どもたちの偏見を再構築する結果をうみだしてきた。

著者は、そのような状況を踏まえ、横軸に Native と Non-Native、縦軸に「無学習」と「深い学習」とを配したモデルを提示した。それは、学習の深まりに応じて、Native（植民地状況下の先住民とその子孫）と Non-Native（非先住民）双方が、先住民文化に対するステレオタイプの本質主義的理解を脱し、ポストコロニアル状況を視野におさめた構築主義的理解へと到達する過程を示している。このモデルが本論文の仮説となるもので、第I部では学校（アメリカ、カナダ、日本など）における先住民学習、第II部では博物館（国立アメリカン・インディアン博物館、ライデン国立民族学博物館など）における先住民学習、第III部では「アメリカ先住民」（コロンブス500年祭、現代のアメリカ先住民など）をテーマにした先住民学習、第IV部では「南の島」（沖縄、ハワイ、グアムなど）に関する先住民学習がとりあげられている。

本論文における先住民とは、たんなる先住者ではなく、別の地域から異なった民族的起源を有する人びとがやってきて地元住民を圧倒し、植民地状況に追いやってしまった時代に、現在の居住地かその一部地域に生活していた人びとの子孫であり、先住民学習とはそうした人びとの歴史的経験や現在のありように関する学習をさす。アメリカ先住民に関する学習を例にとれば、非先住民にとっては無知や偏見にもとづくステレオタイプのイメージの是正が課題であり、「コロニアルなまなざし」の再生産ではなく、その脱却をめざすことが志向される。たとえば東京学芸大学附属世田谷小学校におけるロックアートをつかった学習活動（第6章）では、先住民文化にふれ、作品づくりを楽しむだけでなく、その活動をとおして子どもたちがみずから本質主義的な見かたに気づき、その原因が特定のメディアにあることを認識し、現在の先住民の生活を知ろうとする学習意欲につながる経緯が析出されている。

他方、先住民にとっての先住民学習とは、自文化の否定的属性の受容、あるいは無関心状態から、先住民アイデンティティの自覚、支配的体制への抵抗意識の覚醒へと深化するものとされる。国立アメリカン・インディアン博物館における教育活動（第4章）では、先住民自身が自分たちの歴史の語り手として登場し、先住民と非先住民を問わず博物館を訪れる子どもたちに「コロニアルなまなざし」からの脱却をはかろうとしており、そのこ

との重要性が論じられている。グアムの公教育における先住民学習（第9章）ではチャモロ語やチャモロ文化の学習が積極的に実施されるなかで、それが先住民の自決権や教育環境の改善の要求へとつながっていく過程が分析されている。

本研究は、教育実践への人類学の活用を研究する「教育人類学」(Educational Anthropology)の一つの新しい成果である。アメリカにおいては、アメリカ人類学会(AAA)の下部組織に「人類学と教育に関する研究会議」が設置され、専門誌 *Anthropology and Education Quarterly* が出版され、この分野の研究が蓄積されてきているが、日本においてはこれまで教育学研究においても文化人類学研究においても、十分なされてきたとはいえない。この分野の研究は、大きく①教育過程の人類学的研究と、②教育内容としての人類学の研究、に分類される。①は、初期には、いわゆる「未開社会」における出産や子育て、それに伴う儀礼等の教育機能研究として取り組まれてきた。今日においては、学校や子どもたちの生活場面を中心としたエスノグラフィ研究として行われ、日本においても教育社会学を中心に研究が蓄積されてきている。しかし、②教育内容としての人類学の研究はほとんどなされてこなかった。本論文は、ポストコロニアル人類学の視点から先住民学習の内容を再構成することを通して、従来往々にしてマジョリティの視点に立ってなされてきた先住民学習を脱構築し、その意義と可能性を具体的な実践の検討を通して強調した点に最大の特色がある。

その一方、ポストコロニアル人類学における本質主義批判やコロニアルな視点の脱構築は、非先住民の先住民認識修正に有効であったが、先住民自身が本質主義を活用する「戦略的本質主義」とよばれる問題に直面することになった。また人類学のなかからもポストコロニアル人類学にたいする批判が登場している現状で、これらの問題を教育実践のなかでどう受け止め活かしていくかという課題は本論文の最後で言及されてはいるものの、十分に展開されるには至っていない。先住民の内部は決して一枚岩的ではなく、自己表象においても多様性を示しており、そのことを児童生徒の成長段階に応じたカリキュラムにいかに取り込んでいくかという課題が残されている。

とはいえ、アメリカ先住民のチーフを招いた横浜市立金沢文庫小学校での平和学習の取り組み（第7章）は、新しい授業づくりに道を開くものである。また、パンダナス（沖縄ではアダン）がつなぐオセアニアの先住民文化の発掘と教育実践（第8章）は、たんに共通の植物を生活に利用する文化圏の学習ではなく、国立民族学博物館の特別展でもとりあげた帆船ホクレア号（パンダナスの帆を一部の航海に使用）の航海による先住民と非先住民の社会的連携を創出するところみなどを、脱コロニアリズムの視点に立った学習教材として積極的に活用し、先住民学習の進展に豊かな可能性を提示した。

以上のように、本論文は学校のカリキュラムや博物館の教育プログラムにおける先住民学習の問題点を分析し、学校や博物館の教育現場における文化人類学の理論的成果の活用に展望をひらいた点で先駆的な意義を有するものであり、審査委員は全員一致で本論文が博士の学位に値すると判断した。